

言葉との出会い

桑原 正紀

選歌をしていると知らない言葉におりおり出会う。花や植物の名、地名、人名といった固有名詞はもとより、熟語や成語、方言、外国語等々、知らないものが近年とみに多くなったような気がする。いまはインターネットがあるので、たいていのものは即座に調べがつく。そういうものが無かった昔（ほんの三十年くらい前！）、百科事典や各種図鑑のようなものは選歌に必須のものであった。大変だったけれども、調べて知る喜びが大きかったし、手間がかかった分しっかりと記憶に定着していたように思う。いまは早くたくさん知ることができるが、たちまち忘れてしまうようになってしまった（歳のせいもあるだろうが）。

それはさておき、今月号「コスモス」の選歌では二つの言葉が印象に残った。

ジャガ芋の盗人掘りの五個を煮て味たしかめむ醤油か
塩か

佐々木佳子

捨て漬けをかさねて糠床かぐはしも挽ぎたて茄子を明

日は漬けむよ

石原 佳子

佐々木さんは青森（津軽）の人なので、「盗人掘り」を最初は方言かと思ったが、調べてみると全国的な掘りが見られる言葉であった。ジャガ芋のように土中で育つ過程で生育に大小の差が出るものは、そとと土を掘り返して生育状態を確かめたり、大きいものだけを収穫し、あとはまた埋めておくことを言うようだ。まるで盗人が気づかれないうように農作物を盗んでいく仕事を思わせて、おもしろい言葉だと感心した。さらには作者のいそいそとした行為が目につかび、この歌のおもしろさが倍増した。

石原さんの歌の「捨て漬け」も知らなかった。今更と思われる人も多いだろうが、男性のほとんどは知らないのではなからうか。新しい糠床はすぐに機能するわけではなくて、数週間はキュウリやニンジンやキャベツなどを漬けて取り出すことを繰り返し、糠床に乳酸菌などが充分に発酵する期間が必要という。その間の漬けた野菜は食べることを目的としたものではないので、「捨て漬け」というらしい。それを知ってはじめて、下旬の「挽ぎたて茄子を明日は漬けむよ」にこもる喜びが理解できた。

このように、選歌には苦勞も付きものだが、新しい言葉に出会える楽しみや喜びにも大きいものがある。ましてそれが掲出歌のようないい歌だと、記憶にもしっかりと定着することとなる。